

日蓮大聖人御書全集

ときみつごへんじ

時光御返事

新版
1879
〜
1881

時光御返事

こうあんがんねん

がつ にち

さい

なんじょうときみつ

弘安元年 ('78)

7月8日

57歳

南条時光

麦 白 米 いちだ

薑 おく た お

むぎのしろきこめ一駄・はじかみ、送り給び畢わんぬ。

斛 飯 王 たいし 阿 那 律 もう ひと

いえ

こくぼんおうの太子・あなりちと申す人は、家にましま

とき ぞくしやう がつしこく ほんしゆ 転 輪 じやうおう 末

しし時は、俗姓は月氏国の本主・てんりん聖王のすえ、

しし 類 おう 孫 じやうぼんおう 甥 斛 飯 おう たいし

師子きよう王のまご、浄飯王のおい、こくぼん王には太子

てんか 卑 うえ かちゆう いちにち あいだ

なり。天下にいやしからざる上、家中には一日の間

いちまんにせんになん ひとしゆつにゆう ろくせんになん 財 借 ろくせんになん

一万二千人の人出入す。六千人はたからをかりき。六千人

返 ふにん うえ てんげんだいいち ひと

はかえりなす。かかる富人にておわする上、天眼第一の人、

ほけきよう

ふみようによらい

由

ほとけしる

たも

法華経にては普明如来となるべきよし、 仏記し給う。

かこ ぎよう

だいぜん

尋

昔

これは、過去の行はいかなる大善とたずぬるに、むかし、

獵 師

やま

獸

捕

過

りようしあり。山のけだものをとりにてすぎけるが、また、

稗 作

じき

う

よ

物

ひえをつくり食とするほどに、 飢えたる世なればものもな

稗

飯 ひと

食

利 咥

もう

し。ただ、ひえのはん一つありけるをくいければ、りたと申

しゃくしぶつ

しようにんきた

い

われ

なのか

あいだじき

なんじ

す辟支仏の聖人来つて云わく「我、七日の間食なし。汝

く

得

乞

たま

汚

ぞく

が食いものえさせよ」とこわせ給いしかば、「きたなき俗の

御 器

い

穢

始

そうろう

もう

得

ごきに入れてけがしはじめて 候」と申しければ、「ただえ

いましよく

し

い

畏

進

させよ。今食せずば死ぬべし」と云う。おそれながらまい

しようにん

たま

稗

ひと

粒

らせつ。この聖人まいり給いしが、ただひえ一つびをなり

残

獵師

返

たま

稗

変

猪子

のこしてりようしにかえし給いき。ひえへんじていのこと

へん

こがね

こがねへん

しびと

しびと

なる。いのご変じて金となる。金変じて死人となる。死人

へん

きんじん

ゆび

抜

う

もと

変じてまた金人となる。指をぬいて売れば本のごとし。か

くじゆういちこう

ちようじゃ

う

いま

阿那律

もう

くのごとく、九十一劫、長者と生まれ、今はあなりちと申

ほとけ

みでし

稗

う

くに

して仏の御弟子なり。わずかのひえなれども、飢えたる国

ちしや

おん

命

続

報

得

に智者の御いのちをつぐゆえに、めでたきほうをう。

かしようそんじゃ

もう

ひと

ほとけ

みでし

なか

だいいち

迦葉尊者と申せし人は、仏の御弟子の中には第一に

尊

ひと

ひと

いえ

尋

ま

竭

提 かく

たつとき人なり。この人の家をたずぬれば、摩かだい国の

俱律陀ちようじゃ こ

いえ

畳

せん

畳

いち

畳

尼くりだ長者の子なり。宅にたたみ千じよう。一じようは

厚

しちしやく

げほん

畳

こがねせんりよう

犁

あつき七尺、下品のたたみは金千両なり。からすき

くひやくくじゆうく ひと

犁

こがねせんりよう

こがねさんびやくしじゆうくく

九百九十九、一つのからすきは金千両。金三百四十石入

蔵 ろくじゆう

だいちようじゃ

妻

み

こんじき

れたるくら六十。かかる大長者なり。めはまた、身は金色

じゆうろくり

照

にほんこく

そとおりひめ

過

かんど

李

にして十六里をてらす。日本国の衣通姫にもすぎ、漢土のり

夫 人

超

ふうふ

どうしん

おこ

ほとけ

みでし

ふじんにもこえたり。この夫婦、道心を発して仏の御弟子

ほけきよう

こうみようによらい

言

たも

となれり。法華経にては光明如来といわれさせ給う。この

ににん

ひとびと

かこ

尋

むぎ

はん

しゃくしづつ

くよう

二人の人々の過去をたずぬれば、麦の飯を辟支仏に供養せ

かしようそんじゃ

う

こがね

錢

いちまい

ぶっし

誂

しゆえに迦葉尊者と生まる、金のぜに一枚を仏師にあつら

えて毘婆尸仏の像の御はくにひきし貧人は、この人のめとなれり。

いま にちれん

しようにん

ほけきよう

な

立

今、日蓮は、聖人にはあらざれども、法華経に名をたて

こくしゆ

憎

わ み

塞

うえ

でし

通

ひと

り。国主にくまれて我が身をせく上、弟子・かよう人を

罵

打

しよりよう

取

も、あるいはのり、あるいはうち、あるいは所領をとり、

所

追

こくしゆ

うち

ひとびと

あるいはところをおう。かかる国主の内にある人々なれば、

こころ

ひとびと

訪

こと

たとい心ざしあるらん人々もとうことなし。このこと事

古

ことし

えきびよう

もう

けかち

もう

訪

ふりぬ。なかにも今年は、疫病と申し、飢渴と申し、とい

来 ひとびと

少

病

う

し

くる人々もすくなし。たといやまいなくとも、飢えて死ぬ

疑

むぎ

おん

訪

こがね

過

ことうたがいなかるべきに、麦の御とぶらい、金にもすぎ、

たま

超

か

利咤

稗

へん

きんじん

珠にもこえたり。彼のりたがひえは、変じて金人となる。

ときみつ

むぎ

なん

へん

ほけきよう

もんじ

この時光が麦、何ぞ変じて法華経の文字とならざらん。こ

ほけきよう

もんじ

しゃかぶつ

たま

ときみつ

こしんぷ

そう

の法華経の文字は釈迦仏となり給い、時光が故親父の左右

おんはね

りようぜんじようど

飛

たま

翔

たま

帰

の御羽となりて、靈山浄土へとび給え、かけり給え、かえ

ときみつ

み

覆

育

たま

きようきようきんげん

りて時光が身をおおい、はぐくみ給え。

恐々謹言。

こうあんがんねんしちがつようか

弘安元年七月八日

にちれん

かおう

日蓮

花押

うえのどのごへんじ

上野殿御返事